



糸賀一雄と田村一二におけるケアの肯定的側面の検討

中山, 慎吾

(Citation)

糸賀一雄の思想と実践

(Issue Date)

2021-03-30

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008078>



糸賀一雄と田村一二におけるケアの肯定的側面の検討

中山慎吾（大分大学）

私の人となり

1986年 筑波大学 比較文化学類卒業（現代思想学主専攻）

1991年 筑波大学 社会科学研究科修了（社会学専攻）

1994年 鹿児島経済大学（現：鹿児島国際大学）社会福祉学科

2020年 大分大学 福祉健康学部（社会福祉実践コース）

「春光を浴びて野に出る。野道にたんぽぽが咲いて白い蝶がひらひらと飛び交っている。草麦が微風にゆれる。ひばりの高い鳴き声も耳に楽しい。待ちに待った春になったのだ。

子供達は子兎のように跳ねまわって、土筆やわらびを籠にいっぱい摘んで来る。ほんのりと額が汗ばんで、桜色に上気した頬が健康に輝いている。」

（1947年の春の近江学園での光景を描いた文章と思われる。糸賀一雄著作集刊行会編(1983)『糸賀一雄著作集 I』日本放送出版協会, p.222）

「ケアの肯定的側面 (Positive Aspects of Caregiving)」について

ケアの2要因モデル (ヘイスティングス) cf. Equity Theory (平衡理論): input と rewards

- ・利用者からの感謝といった**肯定的経験**は、職務満足などを高める。
- ・利用者の対応困難な行動への直面といった**否定的経験**は、スタッフのストレスなどを高める。

糸賀一雄の著作について

肯定的経験についての言及はある。 例: 障害児(者)と職員の関わり、共感
しかし、仕事の**使命感**などへの言及もある。 例: この子らを世の光に



ケアの肯定的側面には、ケアにおける肯定的経験ばかりでなく、使命感なども含めて考えることができるのでは？

中野論文 (『ひとと生まれて人間となる』第13章) からのメモ

「糸賀一雄の思想とマーサ・C・ヌスバウムの可能能力アプローチの比較」

ヌスバウム『正義のフロンティア』

cf. 従来の社会契約論への批判・・ロールズ正義論・・合理性 (ヌスバウム2012, p.116)

人間の中心的可能能力 (ケイパビリティ)

①生命 ②身体 of 健康 ③身体 of 不可侵性 ④感覚・想像力・思考力 ⑤感情
⑥実践理性 ⑦連帯 ⑧ほか of 種との共生 ⑨遊び ⑩自分の環境 of 管理

これらのひとつひとつの可能能力がない人生は、人間の尊厳に見合った人生ではない。
各可能能力の閾値レベル以下では、市民たちは真に人間的な機能を得られない。
市民たちの可能能力を閾値レベルまで引き上げるという観点から、社会目標は理解されなければならない。(ヌスバウム2012, p.84-5, p.92)

:

可能能力の保障は、人間の尊厳の基礎となる。

ケアを必要とすることは尊厳を毀損するものではなく、人間の尊厳の一部

(『ひとと生まれて人間となる』p. 207-8, 215、Martha C. Nussbaum, *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*, Belknap Press of Harvard University Press, 2006 = マーサ・C・ヌスバウム『正義のフロンティア 障害者・外国人・動物という境界を越えて』法政大学出版局、2012年)

山崎論文 (『ひとと生まれて人間となる』第12章) からのメモ
「糸賀一雄と憲法における『人間の尊厳』—『津久井やまゆり園事件』を契機として」

- ・津久井やまゆり園事件の被告人の犯行動機をめぐって
 - ・利用者の言動 ・家族の様子 ・職員による利用者の扱い
- ・個人の尊重に関する糸賀の言葉
お互いの生命と自由を大切にすること
 - ・人権として法律的な保護をする以前のもの
 - ・共感と連帯の生活感情に裏付けられていなければならないもの

(『ひとと生まれて人間となる』 p.184, 186, 211)

cf. 「疎外された賃労働」⇔「『ケア』のもつ豊かな可能性と意味」(藤崎2000, 342)

“やりがい”の搾取 (本田 2007)

(藤崎宏子(2000)「育てることと看取ること — ケアの意味づけ」藤崎宏子編『親と子: 交錯するライフコース(シリーズ<家族はいま...>②)』ミネルヴァ書房, 327-343. ; 本田由紀(2007)「<やりがい>の搾取 拡大する新たな『働きすぎ』」『世界』(762), 109-119.)

ヌスバウムが提唱する、人間の尊厳の基礎となる“**可能力の保障**”は、国際社会において合意されうるものだろう。“可能力の保障”は糸賀一雄らの“**発達保障**”の考え方とも重なる。糸賀らはさらに、それらが実際に展開される、ケアの現場の現実の課題に向き合っている。

「・・・熟議するという活動の余地を与えるために、（可能力の）リストの項目はいくばくか抽象的かつ一般的な仕方で定めらるべきことも、私は要求する。諸国が自国の歴史と特殊な状況を考慮に入れながらそうした活動にやや異なるやり方で従事することは、ある一定の限度内において、まったくもって適切である。」（ヌスバウム(2012)p.93.）

「・・・そのような理論（レードルやビオンなどによる集団理論）も、・・・どこの社会にでも妥当するような、**通文化的普遍性**というものをもっているにちがいない。しかしそこに、何ほどか**個別文化的な特性**というものが、しのび込まないという保証はない。何故なら、抽象的集団というものはあり得ず、集団は特定の社会のなかに存在して、それを構成する個々人は、その社会の文化を内面化することによって「**社会化**」されているからである。もし集団の深層理論というものが、そのような**文化的被拘束性**を捨象してしまったところに成り立つものであるとするなら、・・・現実の集団分析にたいしての有効性を低めることになるであろう。」

（山村賢明(1969)「集団の情動的側面と母子関係」『社会学評論』19(4), pp.54-63.）

日本のソーシャルワーカーの多くが、実践の場で念頭におく、「受容」などのケースワークの原則(バイステック)では、相互作用における援助者の側の感受性・内的反応、自己覚知・成長なども重視されている。これらと同様の特徴は、糸賀らの著作にも見られる。

援助関係における態度と情緒：社会的なニードや問題には、情緒が深く関わっている。

☆ケースワーカーは、自らの感受性を育てることによって、クライアントによって異なる多様な情緒の表現の仕方を捉えることができるようになる。

情緒と態度による力動的な相互作用（3つの方向性）

第一の方向：クライアントからケースワーカーへ。（～クライアントの基本的ニーズや感情）

第二の方向：ケースワーカーからクライアントへ。（～態度を通して、ワーカーの理解や反応をクライアントに伝える。）

☆ワーカーの内的反応(ワーカーの内面で生じる反応)は、ケースワークの過程を通して、成長し、深まっていく生き物のようなものである。

第三の方向：ふたたびクライアントからケースワーカーへ向けて。（例：“あなたと話しているととても気分が楽になります”）

田村一二と糸賀一雄

田村一二 (明治42(1909)年 – 平成7(1995)年)

『忘れられた子ら』(1942年)、『手をつなぐ子ら』(1944年)など

糸賀一雄 (大正3 (1914)年 – 昭和43 (1968)年)

昭和19(1944)年 石山学園

cf.田村一二『開墾 – 石山学園をはじめた頃』北大路書房、1979年

昭和21(1946)年 近江学園

cf.糸賀一雄『この子らを世の光に – 自伝・近江学園二十年の願い』柏樹社、1965年

昭和38(1963)年 びわこ学園 (園長:岡崎英彦)

cf.糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会、1968年

糸賀一雄の著作の検討

ケアにおける“肯定的な経験”

- ①障害児(者)と施設職員との関係
- ②障害児(者)と外界の関わり

(中山慎吾(2014)「障害児(者)に関わる人々と『ケアの肯定的側面』－糸賀一雄の発達保障をめぐる著作からの考察」糸賀一雄生誕100年記念事業実行委員会研究事業部会編『糸賀一雄生誕100年記念論文集 生きることが光になる』糸賀一雄生誕100年記念事業実行委員会, 223-238.)

ケアの“肯定的な経験”にとどまらない、ケアの肯定的側面

- ①職員の側の意識の変化、自己成長
- ②社会に向けた働きかけ（一隅を照らす・ミットレーベン、
この子らを世の光に）

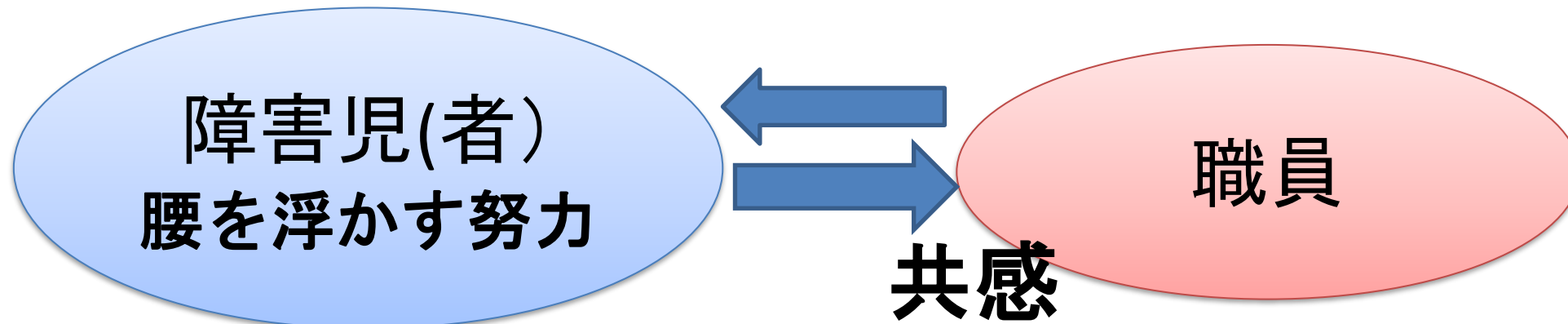
(國本真吾(2016)「糸賀一雄の共感思想と『ミットレーベン』:『共感』から『共鳴』への道程」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』(739), 73-80.)

ケアにおける“肯定的な経験” ①障害児(者)と施設職員との関係

おむつを替えることに関する例：
(身体のコントロールが困難な中、少しでも自分で腰を浮かそうとする努力を、職員が感じとっている。関わりの中で感じられる共感、職員の側にとっても喜びとなる。)

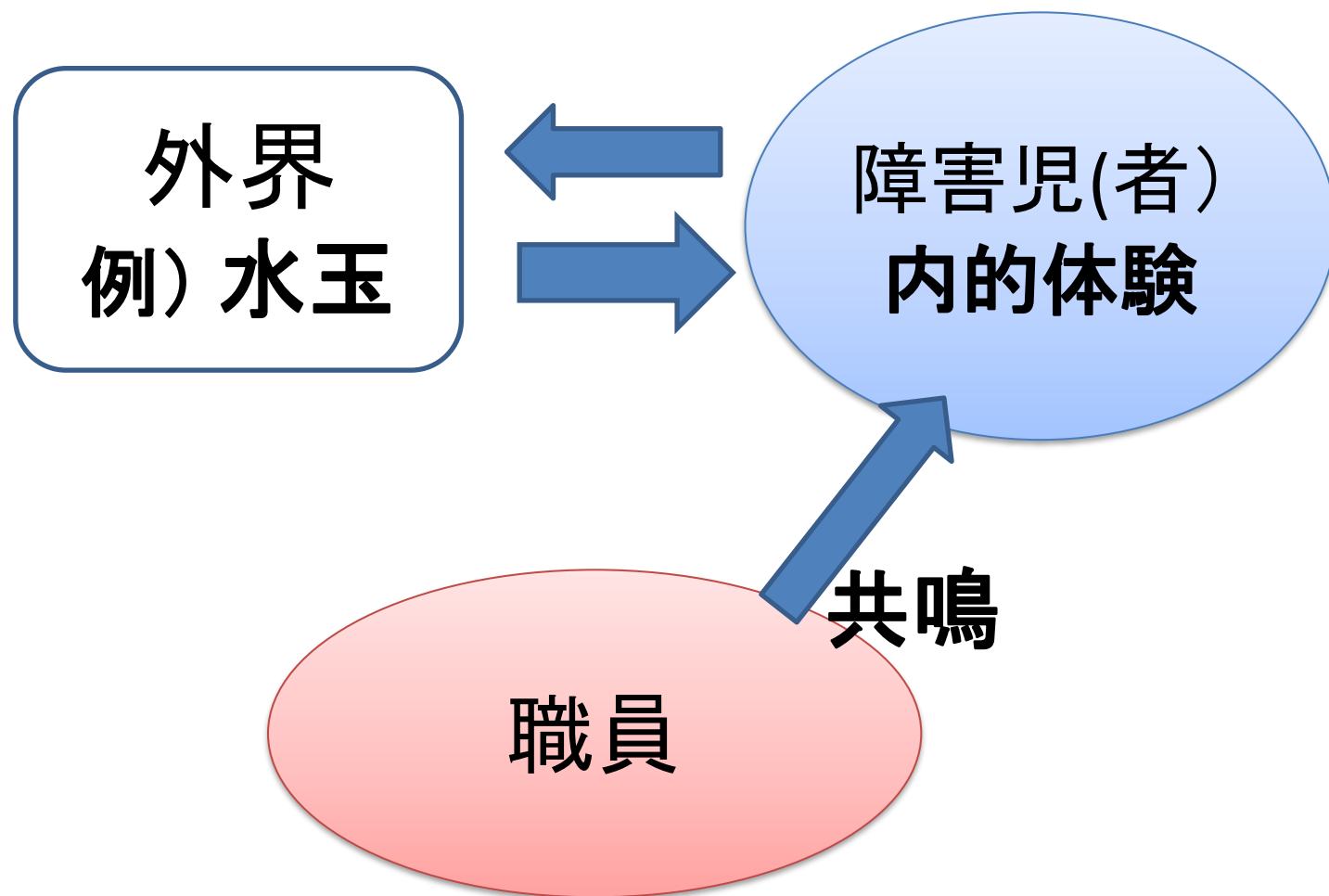
腰をあげようとする力が「電気のように手に伝わって、保母はハッとしました。・・・伝わってくるその響きに生命というものを感じさせられたのです。その**喜びと驚き**。これこそ自己表現、自己実現の姿なのです。」

(糸賀一雄著作集刊行会編(1983)『糸賀一雄著作集Ⅲ』日本放送出版協会, p.382)



ケアにおける“肯定的な経験” ②障害児(者)と外界の関わり

寛ちゃんと水車の水玉の事例



学園の近くを流れる小川の水車小屋で、水車からとびちった水玉がきらきらと七色の虹のように輝いていた。寛ちゃんはそばにしゃがみこんで、朝から夕方まで、水玉の乱舞を心ゆくまでながめていた。そこを通りかかった子どもに、寛ちゃんはひとこと、「おもしろかった」と言った。

(糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会、1968年、pp.19-21)

ケアの“肯定的な経験”にとどまらない、ケアの肯定的側面

①職員の側の、意識の変化、自己成長

人と人との間柄は「**共感の世界**」である。ただし、共感できることには時間がかかる。

障害児への世話・・・「最初はね、いやでいやでしょうがないもんなんですよ」

「**怒り**だとか**憎しみ**だとかいう、そういう愛情だけではないものを、私たちは、実は自分自身のなかに体験している」

知的障害児への**固定的見方**（例：読み・書き・算数のできる人が立派な人で、知的障害児の人間的価値はゼロであるという見方）

・・・施設の職員は、そのようなかたくなな気持ちから解放されなければならない。「そのための**自分自身との対決**がですね、これが私たちの専門職へのですね、大きな魅力になっていなければウソなんです。自分自身との対決のないところの職員なんてのは、これはカスミみたいなもんなんです。」

糸賀一雄(2009)『糸賀一雄の最後の講義 ― 愛と共感の教育[改訂版]』中川書店.

(1968年9月17日に滋賀県大津市での「施設における人間関係」(県の児童福祉施設等新任職員研修会)

②社会に向けた働きかけ（一隅を照らす・ミットレーベン、この子らを世の光に）

特殊教育を学ぶ学生に“まず施設に来て、子どもと一緒に暮らしてごらんなさい。そういうことが一番手っ取り早いし、良く分かることなんだ” ..
「**ミットレーベン**」(ともに暮らす)
「**一隅を照らす**」(伝教大師)・・・ 国宝は伽藍仏像をいうのではなく、一隅を照らす人が国宝である。

・・・施設で、お尻の拭き方も知らない子にお尻の拭き方を教える。お尻の穴を隅と言うなら、お尻の穴を照らす人こそ国宝なり、とも理解できる。

「あのぬるっとした感じをですね、手の先まで身体全体でその身震いするような感じというものを、・・・肌と肌の中で感じ取っていく。まさにこれこそ一隅です。」

「ズルズルの鼻をかんでやるというような、手にその感触がいつまでも残るような『**ミットレーベン**』の中で、初めて発言ができるというような発言もですね、私たちは尊重しなければなりません。それは、一隅を照らしているからであります。・・・この一隅を照らすところから、この子らが世の光となってくるのです。」

田村一二の著作の検討

- ①障害児施設で学生が実習する意味 (田村1974, 116-117)
- ②「流汗同労」、「自然」のもつ教育力、「いのち」の平等 (田村1984:95)

田村一二(1974)『ちえおくれと歩く男』白樹社.

田村一二(1984)『賢者モ来タリテ遊ブベシー 福祉の里 茗荷村への道』日本放送出版協会.

國本真吾(2016)「糸賀一雄の共感思想と『ミットレーベン』:『共感』から『共鳴』への道程」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』(739), 73-80.

(野上芳彦(1998)『シリーズ福祉に生きる 10. 田村一二』大空社.)

「それは子供たちに、短時間であってもとにかく**触れる**ということです。接触のないところに**愛情**がわくということは、普通の人の場合、難しいことでしょうな。

大便のにおいに鼻がひんまがりそうになりながら、おしりを洗ってやったりすると、その子のことは、その実習生には忘れられんものになり、その子もまた、その実習生のことは忘れんようですな。**接触、特に体の接触**があると、実習生の中に、子どもへの**愛**なり、場合によっては**憎**も生まれるかもしれません。しかし、たとえ憎にしても、無関心よりはましです。憎はしばしば愛に変わることがありますからね。

実習生の何パーセントかは、ふれあいによって、子どもを少なくとも、**あたたかい眼**で見守ることができるようになったとすると、そういう人が社会に帰って、道ゆく精薄の母子の姿を見る時の眼は想像できます。・・・あたたかい眼が一つ二つと増え、その層が厚くなっていく、この層が、本当の福祉の基盤ではないかと思うんですな。」

障害のある人との身体的接触を含むふれあいを通じて、「あたたかい眼」が社会の中に増えていくことを願う、という考え方は、糸賀が述べていることに近い。

石山学園：1944年創設・戦時中・
子どもたちとも協力して開墾、農作物。
自然の中で力作業にとり組む

…子どもたちの間で、協力して作業に
励む雰囲気生まれる。班長の立場
にある子どもたちが、リーダーシップを
積極的にとるように。お互いに広い心
で認めあうという変化。

→「『**自然**』のもつ教育力」

「人間は**大自然**から生まれ出たので
あり、大自然によって育てられてきた
のであり、母なる大地という言葉もあ
るくらいで、人間と自然の関係は、表
面的にみただけでわかるものではな
いだろう。そこに、直接、自然の懐に
はいて、**肉体と同時に精神面での**
成長を願った、僧、その他の修行者
の存在も故ないことではないように
思える。」

「人間も、牛も豚も鶏も魚も米も葱も大根もみな『**いのち**』を持っていることに変
りはない。…たった一つの、かけがえのないものであることも同じである。…
生物にとって『いのちは一つ』。**一切の生物**が同一水平線上に並んでいるので、
生物として、そこには何の別もない。」

仕事の意味に関わる概念（Bellahほか）

「**ジョブ**（職）」・・・仕事とはお金を稼いで生計を立てるための手段。

cf. **マイホーム主義**；**ワーク・ライフ・バランス**

「**キャリア**（経歴）」・・・仕事とは職務上の功績や昇進によって前進していく生涯の経過。cf. **立身出世主義**；**キャリア・ディベロップメント**

「**コーリング**（使命）」・・・仕事とはその人の活動と性格に具体的理想を与えるものであり、その人の生活の道徳的意味から切り離せない。

※ コーリングには、個人の仕事を共同体の利益への貢献に結びつけるという考えが含まれる。このような考えは、アメリカにおける聖書的伝統や共和主義的伝統と結びついている。

☆仕事に関する糸賀の考え方は、「**コーリング**」に近い。

☆「共同体の利益への貢献」と結びつくだけではなく、様々なかたちのコーリングがありうる。

仕事の社会的意味

価値
労働の
内在的

流汗同労（自然を身近
に感じつつ汗を流す）
ミットレーベン
一隅を照らす

自己成長、意識の変化
自分の才能や個性の発揮

（個人的意味）

キャリア（経歴） 立身出世主義
（組織における地位の上昇）

コーリング（使命）
共同体の利益への貢献
この子らを世の光に

ジョブ（職） マイホーム主義
（衣食住の必要や生活の維持
の手段としての仕事）

（生物学的意味）

労働の
外在的
・
付带的
価値

仕事の個人的・ 生物学的意味

（参考：湯浅泰雄(1967)『経済人のモラル』塙書房、pp.184-186. ）

まとめ（糸賀一雄と田村一二におけるケアの肯定的側面の検討）

ケアの肯定的側面は、ケアの**肯定的経験**ばかりでなく、**使命感**なども含めて考えられる。

糸賀一雄の著作

- ・**肯定的経験**への言及が見られる（障害児(者)と関わりの中で感じられる共感；障害児(者)の内的体験への共鳴）
- ・**使命感(コーリング)**への言及も見られる（職員の側の意識の変化、自己成長；一隅を照らす・ミットレーベン → この子らを世の光に …社会への働きかけ）

田村一二の著作

- ・障害のある人との身体的接触を含むふれあいを通じて、「あたたかい眼」が社会の中に増えていく。
- ・「流汗同労」、「自然」のもつ教育力(心身の成長)、「いのち」の平等

☆社会への働きかけを、**人間的交流や自分自身の成長**と関連づけている。

（“身近な人たちを心から「仲間」と感じられるようになること”もコーリングでありうる。）